池窪弘務作品集十四（二〇一五年）

おくのほそ道・読み語り

目次

一　旅立ち
二　草加
三　室の八嶋
四　仏五左衛門
五　日光
六　那須野
七　黒羽
八　雲岸寺
九　殺生石・遊行柳
十　白河の関
十一　須賀川
十二　安積山

十三 信夫の里
十四 佐藤庄司が旧跡
十五 飯塚の宿
十六 笠嶋
十七 武隈の松
十八 宮城野
十九 壷碑
二十 末の松山
二十一 鹽竈神社
二十二 松島
二十三 瑞岩寺
二十四 石の巻
二十五 平泉
二十六 尿前
二十七 尾花沢
二十八 立石寺
二十九 最上川
三十 出羽三山
三十一 酒田

三十二　象潟（きさがた）
三十三　越後（えちご）
三十四　市振（いちぶり）
三十五　那古（なご）
三十六　金沢
三十七　太田（ただ）の神社（じんじゃ）
三十八　那谷（なた）
三十九　山中（やまなか）
四十　全昌寺（ぜんしょうじ）
四十一　汐越（しおごし）の松　天竜寺（てんりゅうじ）　永平寺
四十二　福井
四十三　敦賀（つるが）
四十四　種（いろ）の浜（はま）
四十五　大垣（おおがき）

＊「芭蕉自筆奥の細道」岩波書店を底本としました。

＊【読み語り】のポイントを赤文字で示しました。

一　旅立ち

目次へ

【原文】

月日は百代の過客にして、行きかふ年も又旅人也。舟の上に生涯をうかべ、馬の口とらへて老いをむかふるものは、日々旅にして旅を栖とす。古人も多く旅に死せるあり。いづれの年よりか、片雲の風にさそはれて、漂泊の思ひやまず、海浜にさすらへて、去年の秋江上の破屋

に、蜘の古巣をはらひて、やや年も暮、春改れば、霞みの空に、「白河の関こえむ」と、そぞろ神の、物に付て心をくるはせ、道祖神のまねきにあひて、取るもの手につかず、もも引の破れをつづり、笠の緒つけかへて、三里に灸すゆるより、松嶋の月、先心もとなし。住る方は人に譲りて、杉風が別墅に移るに、

草の戸も住替る代ぞ雛の家

面八句を書きて、庵の柱に懸置。

弥生も末の七日、元禄二とせにや、明ぼのの空、朧々として、有りあけにて、光おさまれる物から、富士の峰かすかに見えて、上野谷中の花の梢、「又いつかは」と心ぼそし。むつましきかぎりは、宵よりつどひて、舟に乗りて送る。千じ

ゆと云所にて、船をあがれば、前途三千里のおもひ胸にふさがりて、幻のちまたに離別の涙をそそぐ。

行春や鳥啼魚の目は泪

これを矢立の初として、行道猶すすまず。人々は途中に立ならびて、「後かげのみゆる迄は」と、見送るなるべし。

【語釈・語り】

月日を「時間」と訳するのは英語訳なら可能かも知れないが、意訳過ぎる。月と太陽の意も含んでいる。年と対語になっている点も注意。

過客も難しい。通り過ぎる旅客（三省堂漢和辞典第四版）。旅人を重ねるのはどうかと思うが、「通り過ぎて行く」という言葉を補って訳した。

うかべの下に「者」を補いたいところだが、リズムが崩れる。日本語としてのつながりがおかしくなるが、そのままにした。

死せるあり死せるは已然形で、「已に死んでしまった」になる。後に「人」を補って訳した。

さすらへは下二段活用の自動詞。さすら・ふ は[一]自動詞ハ行四段活用〜は／ひ／ふ／ふ／へ／へ〜と[二]自動詞ハ行下二段活用活用〜へ／へ／へ／ふ／ふる／ふれ／へよ〜の二種類があります。ここは[二]。

物は風物の意で、わが身の意ではない。「片雲(へんうん)の風」にも通じる。

弥生も末の七日陰暦三月二七日。この年は閏一月があり陽暦の五月一六日。

元禄二(ふた)とせ元禄二年。１６８９年。にや前年に改元されているのでボケてみた。

幻のちまたは作者の死生観を表しているが、詩的な言葉でもある。

行春ラストの「行秋ぞ」と対句になっている。

べしは推量で「…にちがいない」。義務にとってはいけない。この助動詞は一筋縄でいかない。必ず辞書にあたるべし。

【現代語訳】

月日は永遠に通り過ぎて行く旅人であり、去来する年も又旅人である。舟の上に生涯を浮かべ、馬の口をとらえて老いを迎える者は、日々が旅であり旅を住処とする。古人も多く旅に死んだ人あり。いつの年からか、ちぎれ雲を吹き漂わせる風に誘われて、漂泊の思いが止まず、海浜をさすらいて、去年の秋、川のほとりのあばら屋に帰り、蜘蛛の古巣を払って、やがて年も暮れ、春が改まれば、霞

の空に、「白川の関を越えよう」と、分けの分からない神が、自然の風物に取り憑き自分の心を狂わせ、道祖神が招いているようで、何もかも手につかず、股引の破れを繕い、笠の紐をつけ替えて、足の三里に灸をすえているうちに、松嶋の月が、早くも待ち遠しい。住んでいた処は人に譲り、杉風の下屋敷に移る時に、

草の戸も住替る代ぞ雛の家

表八句を書いて、庵の柱に掛けておく。

弥生も末の七日、今年は元禄二年であったろうか。曙の空は、ぼんやりと霞み、月は有明で、光は消えつつあるも、富士の峰が微かに見えて、上野谷中の桜の梢を、「再び見るのはいつの日か」と心細い。親しい人はみんな、前の晩から

集まって来て、舟に乗り送ってくれる。千住と云う処で舟から上がると、前途三千里の思いが胸にふさがり、幻の現世の別れ道に、離別の涙を流す。

行春や鳥啼魚の目は泪

これを矢立の初とするが、行く道が少しも進まない。人々は道なかに立ち並んで、「後ろ姿の見えるまでは」と、見送っているのだろう。

二　草加

目次へ

【原文】

此のたび、奥羽長途の行脚、ただかりそめにおもひ立ちて、呉天に白髪の恨を重ぬといへども、耳にふれて、いまだに

見ぬ境、「若生て帰らば」と、定めなき頼の末を楽て、其日漸早加と云宿にたどりて、痩骨の肩にかゝれる物、先くるしむ。「唯身すがらに」と拵出立侍るを、帋子一衣は夜臥為と云、ゆかた、雨具、墨、筆のたぐひ、あるはさりがたき花むけなどしたるは、さすがに打捨がたくて、日々路頭の煩となれるこそ、わりなけれ。

【語釈・語り】

たどりて　ing。途中で感じている。わりなけれ「あぁ」という感じ。アイロニーではない。

【現代語訳】

この度、奥羽への長途の行脚を、ふと決心して、異郷で白髪となる悔恨を重ねることではあるが、耳に聞いていても、

まだ見たことのない土地を訪ね、「もし生きて帰ることが出来たら」と、あてにならない微かな望みを行く末の楽しみとして、その日、やっと草加という宿に辿りて、痩骨の肩にかかる荷物に、真っ先に苦しむ。「只身一つで」と身支度したのだが、紙子一枚は夜寝るためと云い、ゆかた、雨具、墨、筆のたぐい、あるいは断れない餞別などしてくれた品々は、さすがに捨てられず、日々道中の煩いとなるのは、ほんに仕方のないことだった。

三　室の八嶋

目次へ

【原文】

室の八嶋に詣。曾良が曰、「此神は木の花さくや姫の神と申て富士一躰也。無戸室に入て焼たまふちかひのみ中に、火々出見のみことうまれ給ひしより、室

の八嶋と申。又煙を読習し侍るもこの謂也。将、このしろと云魚を禁ず」縁起旨、世に伝ふことも侍し。

【語釈・語り】

詣終止形の送り仮名を書かない例が多い。申も同じ。侍丁寧語・謙譲語というより、雅語意識により用いられている語調を整えるもの。「侍」は極めて多い。丁寧語を含めて三十を越え侍。このしろは身を焼く↓煙↓魚を焼いて食べる。子の代（子供の身代わり）の伝承がある。

【現代語訳】

室の八嶋に参詣する。曽良が言うには「この神は、木花咲耶姫の神と申して、富士山と同じ御神体です。戸口をふさいだ室に入り、御身を焼かれ身の潔白を誓う最中に、火火出見の尊がお生まれにな

ったので、室の八嶋と申す。また煙を詠む習わしがあるのもこの謂です。また、このしろと云う魚を食するを禁じています」と。こうした縁起の趣旨が、世に伝わっている話もあるようだ。

四　仏五左衛門

目次へ

【原文】

卅日、日光山の麓に泊る。　あるじの云けるやう、「我名を、仏五左衛門と云。万正直を旨とする故に、人かくは申侍ままま、一夜の草の枕も、打ちとけて休み給へ」と云。　「いかなる仏の濁世塵土に示現して、かかる桑門の乞食順礼ごときの人を、たすけ給ふにや」と、あるじのなす事に、心をとどめて見るに、唯無知無分別にして正直偏固のもの也。剛毅朴訥の仁に、ちかきたぐひ、智愚の

清質、　尤尊ぶべし。

【語釈・語り】

ままので。旨モットー。尤当然。

【現代語訳】

三十日、日光山の梵に泊る。主が言ったことは、「我名を、仏五左衛門と云います。万事正直を信条としております故に、人はこのように申しておりますので、一夜の旅寝も、くつろいでお休みください」と云う。「どのような仏が濁り塵にけがれた現世に示現して、こんな僧形の乞食順礼のような者を、お助けになるのか」と、主のすることを気をつけて見ていると、ただ無知無分別で、正直一途の者である。論語の剛毅木訥は仁に近きの類で、愚を悟る清らかな資質は、当然尊ぶべきである。

五　日光

目次へ

【原文】

卯月朔日御山に詣拝す。往昔、比御山を、二荒山と書きしを、空海大師開基の時、日光と改め給ふ。千歳未来を、さとり給ふにや、今比御光、一天にかかやきて、恩沢八荒あふれ、四民安堵の栖、穏也。猶、憚多くて、筆を指置ぬ。

あなたふと青葉若葉の日の光

黒髪山は霞かかりて、雪いまだ白し。

剃捨て黒髪山に衣更　　曾良

同行、曾良は河合氏にして、惣五郎と云。芭蕉の下葉に、軒をならべて、予が

薪水の労をたすく。此のたび、松嶋象潟の眺、共にせむ事をよろこび、且は羈旅の難をいたはり、旅立暁髪を剃り、墨染にさまをかへて、惣五を改て宗悟とす。仍て黒髪山の句有。衣更の二字、力有りてきこゆ。

二十余丁、山を登て滝有。岩洞の頂より飛流して百尺、千岩の碧潭に落。岩窟に身をひそめ入て、滝の裏よりみれば、うらみの滝と、申伝え侍る也。

暫時は滝にこもるや夏の初

【語釈・語り】

猶さらに。暁その際。きこゆ理解される。え口語の発音通りに書いた。書写の折に「へ」と書き改められた考える。

【現代語訳】

四月朔日、お山に詣拝する。その昔、このお山を、「二荒山」と書いたが、空海大師が開基の時に、日光とお改めになった。千年の未来を悟られたのだろうか、今やご威光は、全国土に輝きて、恵みは八方の隅々まで溢れ、四民が安心して暮らす国は、穏やかである。さらに言葉を加えるのは畏れ多いので、筆を控える。

あなたふと青葉若葉の日の光

西村本

あらたふと青葉若葉の日の光

黒髪山は霞がかかって、雪がまだ白く残っている。

剃捨てて黒髪山に衣更　曾良

同行の曽良は、河合氏で、惣五郎と云う。芭蕉の下葉に軒をならべて住み、予の炊事の苦労を助けてくれる。このたび、松島象潟の眺を共にする事を悦び、また道中の難儀をいたわろうと、旅立ちの時に髪を剃り、墨染めの僧衣に姿を替え、惣五を改めて宗悟とする。よって黒髪山の句がある。衣更の二字、力があると感じられる。

二十余町、山を登ると滝がある。岩洞の頂きから飛び流れ百尺、千岩の深く青々とした淵に落ちる。岩窟に身を潜めて入り、滝の裏より見るので、裏見滝と言い伝えているのである。

暫時は滝に籠るや夏の初

六　那須野

目次へ

【原文】

那すの黒ばねと云処に知人あれば、これより野越にかかりて、直道をゆかむとす。遥かに一村を見かけて行に、雨降り日暮るる。農夫の家に、一夜をかりて、明れば又野中を行。

そこに野飼の馬あり。草刈おのこになげきよれば、野夫といへ共、さすがに情しらぬには、あらず。「いかがすべきや。されば共、此野は東西縦横にわかれて、うゐうゐ敷旅人の道ふみたがへむ、あやしう侍れば、この馬のとどまる処にて、馬を返し給へ」と、ちいさきものふたり、馬の跡したひてはしる。ひとりは小娘にて、名をかさねと云。聞なれぬ名の、やさしかりければ、

かさねとは八重撫子の名成べし　　曾

良

頓(やが)て人里に至れば、あたひを鞍(くら)つぼに結(むすびつけ)付て、馬を返しぬ。

【語釈・語り】

小娘(こむすめ)西村本は小姫。やさし優雅。

【現代語訳】

那須(なす)の黒羽(くろばね)という所に知人がいるので、ここから野(の)越(ごえ)になり、直道(すぐみち)を行こうとする。遥かに一村(いっそん)を見て行くに、雨が降り日が暮れてしまった。農夫の家に一夜の宿をかりて、明ければ又野(の)中(なか)を行く。そこに野(の)飼(がい)の馬がいる。草を刈る男に嘆願すれば、田舎者といえ、さすがに情(なさけ)知らずではなく「どうしたものか。しかし、この野は東西(とうざい)縦横(じゅうおう)に分かれて、慣れない旅人は、道に迷うかも知れないし、心配

ですから、この馬のとまったところで、馬を返してください」と云う。小さな者二人、馬の跡について走る。一人は小娘で、名をかさねと云う。聞き慣れない名が、優雅なので、

かさねとは八重撫子の名成べし　曽良

やがて人里に至り、謝金を鞍壺に結わえ付けて、馬を返した。

七　黒羽

目次へ

【原文】

黒羽の館代、浄坊寺何某の方に、音信。おもひがけぬ、あるじのよろこび、日夜語つづけて、其弟桃翠など云が、朝夕勤とぶらひ、自の家にも伴ひて、親属の方にもまねかれ、日をふるままに、

ひとひ郊外に逍遥して、犬追ものの跡を一見し、那すの篠原をわけて、玉藻の前の古墳をとふ。それより、八幡宮に詣。与一宗高、扇の的を射し時、「別ては我国、氏神正八まん」と、ちかひしも、此神社にて侍るときけば、感応殊しきりに覚らる。暮れば桃翠宅に帰る。

修験光明寺と云有。そこにまねかれて、行者堂を拝す。

夏山に足駄を拝む首途哉

【語釈・語り】

おもひがけぬ（訪問に）あるじの（は）よろこび（て）。ひとひある日。感応神仏のありがたさを感じる。

【現代語訳】

黒羽の館代である、浄坊寺何某の処を

訪れる。思いがけない訪問に、主は喜び、日夜語りつづけ、その弟の桃翠とか云う人が、朝夕に接待に心を尽くして訪ね、自分の家にも伴い、親戚の家にも招かれて、日が経つうちに、ある日郊外に逍遙して、犬追物の跡を一見し、那須の篠原に分け入り、玉藻の前の古塚を訪れる。それから、八幡宮に詣でた。与市宗高が、扇の的を射し時、「とりわけ我国の、氏神正八幡」と祈願したのも、この神社でございますと聞くと、ありがたさがますます強く感じる。日が暮れたので、桃翠宅に帰る。

修験光明寺と云う寺がある。そこに招かれて、行者堂を拝す。

夏山に足駄をおがむ首途哉

八　雲岸寺

目次へ

【原文】

当国、雲岸寺のおくに、仏頂和尚の、山居の跡あり。

「竪横の五尺にたらぬ草の庵

むすぶもくやし雨なかりせば

と、松の炭して岩に書付侍り」と、いつぞやきこへ給ふ。「其跡みむ」と、雲岸寺に杖を曳ば、人々すすむで、共にいざなひ、若き人おほく道の程打さはぎて、おぼえず彼麓に至る。山はおくあるけしきにて、谷道はるかに、松杉くろく、苔したりて、卯月の天　今猶寒し。十景尽る所、橋をわたつて、山門に入。

さて、「かの跡は、いづくの程にや」と、後の山にかけのぼれば、石上の小庵、岩窟に

むすびかけたり。妙禅師の死関、法雲法師の石室を、みるごとし。

木啄も庵はくらはず夏木立

と、とりあへぬ一句、柱に残侍りし。

【語釈・語り】

書付侍り　一所不住の精神。きこへ給ふ仰っていた。おほく（若い人が）多く。おくあるけしき奥深い様子。

くらはず（食らはず）（西村本は「やぶらず」。

【現代語訳】

この国の雲岸寺の奥に、仏頂和尚の山居の跡がある。

「竪横の五尺にたらぬ草の庵

むすぶもくやし雨なかりせば

と、松明の消し炭で岩に書き付けました」と、いつぞや仰っていた。「その跡

を見よう」と雲岸寺に杖を曳けば、人々は進んで、共に誘い合い、若い人々が多く、道中賑やかに騒ぎ、いつの間にか寺のある山の桀に着いていた。山は奥深い様子で、谷間の道が遥かに続き、松杉が黒く繁り、苔の雫が滴り、卯月の時候は今なお寒い。十景の尽きる処で、橋を渡って、山門に入る。

さて、「かの跡はどこか」と、後の山にかけ登れば、岩の上に小さな庵が、岩窟に寄せかけて造ってある。妙禅師の死関、法雲法師の石室を、見るようだ。

木啄も庵はくらはず夏木立

西村本

木啄も庵はやぶらず夏木立

と、とりあえずの一句を柱に残した。

九　殺生石・遊行柳

目次へ

【原文】

これより殺生石に行。館代より馬にて送らる。此口付のおのこ、「短尺得させよ」と乞。「やさしき事を望侍るものかなと、

野をよこに馬挽むけよ郭公

殺生石は温泉の出る山陰にあり。石の毒気いまだほろびず、蜂蝶のたぐひ、真砂の色の見えぬほど、かさなり死す。

又、清水ながるるの柳は、芦野の里にありて、田の畔に残る。此所の郡守、故戸部某の、「此柳見せばや」など、折おりにの給ひきこえ給ふを、「いづくのほどにや」とおもひしを、けふ、この

柳のかげにこそ、立寄侍つれ。

田一枚植えて立去る柳かな

【語釈・語り】

殺生石鳥羽天皇の寵妃玉藻前（老狐の化身）が殺されて石と化した。やさしき優しき。ばや願望。

【現代語訳】

ここから、殺生石に行く。館代から馬で送られる。この馬を引く男、「短尺をください」と乞う。「風雅なことを望むものだ」と、

野を横に馬牽むけよ郭公

殺生石は、温泉の湧き出る山陰にある。石の毒気はいまだになくならず、蜂蝶の

たぐい、真砂の色が見えないほど、重なって死んでいる。

又西行法師が詠んだ清水流るるの柳は、芦野の里にあって、田の畔に残っている。この地の郡守、故戸部某が、「この柳を見せたいものだ」と、折々に仰っていたので、「どのあたりだろうか」と思っていたが、今日、とうとうこの柳の蔭に、立ち寄ったのだった。

田一枚植て立去柳かな

十　白河の関

目次へ

【原文】

心もとなき日数重るままに、白川の関にかかりて旅心定りぬ。「いかでみやこへ」と、便もとめしも断なり。中にも、

此関は、三関の一にして、風騒の人、こころをとどむ。秋風を耳に残し、もみぢを俤にして、青葉の梢猶あはれ也。卯の花の白妙に、茨の花の咲そひて、雪にもこゆるここちぞする。古人冠をただし、衣装を改めし事など、清輔の筆にも、とどめ置れしとぞ。

卯の花をかざしに関の晴着哉　　曾良

【語釈・語り】

ままにうちに。便つて。中にも（名所の）。白川。卯の花。茨の花。雪。白の連鎖。かざし頭髪または冠にさした花枝または造花。

【現代語訳】

不安な旅の日数が重なってゆくうちに、白河の関にさしかかり、旅心が定まった。

平兼盛が関越えの感慨を「いかで都へ」とつてを求めたのも道理である。とりわけ、この関は奥州三関の一つで、多くの歌人が、心をとどめた。能因法師の秋風を耳に残し、源頼政の紅葉を思い浮かべていると、眼前の青葉の梢が一層心にしみる。卯の花が一面に真っ白に咲いているところへ、茨の花が咲き添って、雪の中に関を越えているような心地がする。古人は冠を正し、衣服を改めた事など、藤原清輔の袋草紙にも、書き留めておかれたとか。

卯の花をかざしに関の晴着哉　　曾良

十一　須賀川　目次へ

【原文】

兎角して、越行ままに、あふくま川を

わたる。左に会津根高く、右に、岩城、相馬、箕張の庄、常陸、下野の地をさかひて、山つらなる。かげ沼と云所を行に、けふは、空曇りて、物の影うつらず。

須か川の駅に、等躬といふものをたづねて、四五日とどめらる。先、「白河の関、いかにこえつるにや」と問。「長途のくるしみ、身心つかれ、且は、風景に魂うばはれ、懐旧に腸を断て、はかばかしう、おもひめぐらさず。

風流の初やおくの田植うた

「無下にこえむもさすがに」と語れば、脇、第三とつづけて、一巻となしぬ。

この宿の傍に、大き成栗の木陰を、たのみて、世をいとふ僧有。「橡ひろふ太山もかくや」と、閒に覚られて、も

のに書付侍。其詞、

栗といふ文字は西の木と書て、西方浄土に便ありと、行基菩薩の、一生、杖にも柱にも、此木を用給ふとかや。

世の人の見付ぬ花や軒の栗

【語釈・語り】

ままにうちに。（後方には）常陸……。腸を断深い感銘に浸り。無下に一句もなしに。

【現代語訳】

そうこうして、関を越えて行くうちに、阿武隈川を渡る。左に、会津根が高くそびえ、右に、岩城、相馬、三春の庄と続き、後方にはこの磐城の地と関東方の常陸、下野の地を境にして、山が連なっ

ている。かげ沼というところを通ったが、今日は、空が曇っていて、物の影が映らない。

須賀川の宿駅に、等窮という者を訪ねて、四五日引き留められた。真っ先に、「白河の関はどんな句を詠んで越えられましたか」と問う。「長旅の苦しみで、心身疲れ、その上、風景に魂が奪われ、懐旧に断腸の思いで、はかばかしく句作に思い巡らすことが出来ませんでした。

風流の初やおくの田植うた

「無下に関を越えるのはさすがに心残りで」と語れば、脇、第三と続けて、一巻に仕上げた。

この宿駅の傍らに、大きな栗の木陰を頼りにして、世を厭う僧がいる。西行

法師の「橡ひろふ深山もこのようであろうか」と、閑雅に思われて、懐紙に書き付けた。その詞。

栗という文字は西の木と書きて、西方浄土にゆかりがあると、行基菩薩は、一生、杖にも、柱にも、この木をお使いになったとか。

世の人の見付ぬ花や軒の栗

十二　安積山

目次へ

【原文】

等躬が宅を出て、五里計、檜皮の宿を離れて、あさか山有。道より近し。此あたり沼多し。かつみ刈比も、ややちかふなれば、「いづれの草を花かつみとは

云ぞ」と、人々に尋侍れども、更知人なし。沼を尋、人にとひ、「かつみかつみ」と、尋ありきて、日は山の端にかかりぬ。二本松より右にきれて、黒塚の岩屋一見し、福嶋に泊る。

【語釈・語り】

花かつみ（あさか沼の）。歌枕。黒塚鬼女伝説。

失われた歌枕。それをひたすら訪ねる旅人。歌枕は忘却の中にある。

【現代語訳】

等窮の宅を出て、五里ばかりの桧皮の宿を過ぎると、あさか山がある。街道から近い。このあたり沼が多い。かつみを刈る頃も、そろそろ近いので、「どの草を花かつみと言うのか」と人々に尋ねたけれど、いっこうに知る人はない。沼の

あたりを探し、人に問い、「かつみかつみ」と尋ね回るうちに、日は山の端にかかった。二本松より右に折れて、黒塚の岩屋を一見し、福島に泊まる。

十三　信夫の里

目次へ

【原文】

あくれば、しのぶもぢ摺の石を尋て、忍ぶの里に行。はるか山陰の、小里に、石の半、土に埋てあり。里の童べの来りて、をしへけるが、「むかしは、この山の上に侍しを、往来の人の、麦艸をあらして、この石を試侍るをにくみて、この谷につき落せば、石のおもて、下ざまにふしたり」と云。さもあるべき事もや。

早苗とる手もとやむかししのぶ摺

【語釈・語り】

歌枕は土に埋まっていた。「もや」か「にや」か芭蕉は迷っている。真跡は「に」を削除の上に「も」を重ね書き。科学のわざは推敲の跡も明らかにしています。

【現代語訳】

明ければ、しのぶもぢ摺(ずり)の石を尋(たずね)て、忍ぶの里に行く。遥か山陰の小さな里に、石は半ば埋もれていた。里の子供が来て、教えてくれたのは、「昔は、この山の上にあったのですが、通る人が、畑の麦草(むぎくさ)を抜き荒らして、この石に摺(す)りつけて試されるのを憎み、土地の人々がこの谷に突き落としたので、石の面(おもて)が、下に伏してしまった」と云う。そんなことがあるべきだろうか。

早苗とる手もとや昔しのぶ摺

十四　佐藤庄司が旧跡

目次へ

【原文】

月の輪の渡しを越て、瀬の上と云宿に出。佐藤庄司が旧跡は、ひだりの山際一里半計に有。飯塚の里、鯖野と聞て、尋尋行に、丸山と云に、尋あたる。是庄司が旧館也。麓に大手の跡など、人のをしゆるにまかせて、泪を落、又かたはらの古寺に一家の石碑を残。中にも、二人の嫁がしるし、先あはれなり。「をんななれ共、かひがひ敷名の、世に聞えつるもの哉」と、袂をぬらしぬ。墮涙の石碑も遠きにあらず。寺に入て、ちやを乞へば、爰に義経の太刀、弁慶が笈をとどめて、什物とす。

弁慶が笈をもかざれ帋幟

五月朔日の事也。

【語釈・語り】

かひがひ敷けなげな（勇ましいさま）。幼く力の弱い者が、困難な状況で立派に振る舞うさま。

【現代語訳】

月輪の渡しを越えて、瀬の上という宿に出る。佐藤庄司の旧跡は、左の山際の、ここから一里半ほど行ったところにある。飯塚の里の、鯖野と聞いて、尋ね尋ね行くに、丸山と云う処に行き着いた。これが庄司の旧城跡である。麓に、大手門の跡など人が教えるにまかせて、泪を落とし、又かたわらの古寺に、一族

の石碑を残す。中でも、二人の嫁の石碑が、真っ先に心を打つ。「女の身ながら、甲斐甲斐しき名声が、よくぞ世に伝え残ったものだ」と、袂を濡らした。堕涙の石碑も遠き中国にあらず。寺に入って、茶を乞うと、ここに義経の太刀、弁慶が笈を所蔵し、秘蔵の宝物としている。

弁慶が笈をもかざれ帋幟

西村本

笈も太刀も五月にかざれ帋幟

五月一日のことであった。

十五　飯塚の宿　目次へ

【原文】

其夜、飯塚にとまる。出湯あれば、湯

に入(いり)て、宿をかるに、土坐(どざ)に莚(むしろ)を敷(しき)て、あやしき貧家(ひんか)也(なり)。ともしびもなければ、ゆるりの火(ほ)かげに、寐所(ねどころ)をまうけてふす。夜に入(いり)て、雷鳴(かみなり)、雨しきりに降(ふり)て、ふしたる上(うえ)に雨もりて、蚤蚊(のみか)にせせられて眠(ねむ)らず。持病さへおこりて、消入計(きえいるばかり)になん。短夜(みじかよ)の空も、やうやう明(あく)れば、又旅立(たびだち)ぬ。

猶(なお)よるの名残(なごり)、心すすまず。馬かりて、桑折(こおり)の駅に出(いず)。はるかなる行末(ゆくすえ)をかかえて、かかる病覚束(やまいおぼつか)なしといへど、「羈旅(きりょ)、辺土(へんど)の行脚(あんぎや)、捨身(しゃしん)、無常(むじょう)の観念(かんねん)、道路(どうろ)にしなん、これ天(てん)の命(めい)なり」と、気力聊(いささか)とり直し、路縦横(みちじゅうおう)に踏(ふみ)て、伊達(だて)の大木戸(おおきど)をこす。

【語釈・語り】

あやしきみすぼらしく。ゆるりいろり。なん（侍(はべ)る）。やうやうやっとのことで↓草加。猶(なお)まだ。名残(なごり)余波。かりて雇っ

て。覚束なし不安である。

【現代語訳】

その夜、飯塚に泊まる。出湯があるので、湯に入り、宿を借ると、土間に筵を敷いた、粗末な貧家であった。燈火もないので、囲炉裏の火影に、寝床をつくり横になった。夜に入り、雷が鳴り、雨が激しく降り、寝ている上より雨が漏り、蚤蚊に刺され眠れない。持病まで起こって、気を失いそうだ。短夜の空も、やっと明けたので、又旅立った。

まだ昨夜の名残で、気分が進まず、馬を雇って、桑折の駅に出る。遥かな行く道のりを抱えて、このような病は、心細いが、「羈旅、辺土の行脚、捨身、無常の観念、道路に死なん、これも天命だ」と、気力を少し取り戻し、道を縦横に踏み締めて、伊達の大木戸を越えた。

十六　笠嶋

目次へ

【原文】

あぶみ摺、白石の城過て、笠じまの郡に入れば、「藤中将実方の塚は、いづくの程ならん」と、人にとへば、「これより遥右に見ゆる山際の里を、みのわ笠嶋と云、道祖神の社、かた見の薄、今に侍る」とをしゆ。此比の、五月雨に、道いとあしく、身つかれ侍れば、よそながらながめやりて過るに、「みのは、笠じまも、五月雨の、折にふれたり」と、

笠嶋はいづこさ月のぬかり道

【語釈・語り】

実方は「枕草子」にも多く語られています。よそ余所。折時期。ふれたり降る

の含意。（蓑も笠も）よく触れ合っている（と苦笑）。

【現代語訳】

鐙摺、白石の城を過ぎて、笠嶋の郡に入ったので、「藤中将実方の塚は、どのあたりか」と、人に問えば、「ここから遥か右に見える山際の里を箕輪笠嶋と云う。道祖神の社、かた見の薄が、今も残っています」と教えてくれた。この頃の、五月雨に、道が極度に悪く、身体も疲れたので、他所から眺て通り過ぎたのだが、「蓑輪、笠嶋の地名も、五月雨の、時期によく似合っている」と、

笠嶋はいづこ五月のぬかり道

十七　武隈の松

目次へ

【原文】

岩沼宿

武隈の松にこそ、目覚る心地はすれ。根は土際より二木にわかれて、むかしの姿うしなはずと、しらる。先能因法師思ひ出。往昔、むつのかみにて下りし人、此木を伐て、名取川の橋杭にせられたる事など、あればにや、「松は此たび跡もなし」とはよみたり。代々、あるはきり、あるひは植次などせしと聞に、今将千歳のかたちととのひて、めでたき松のけしきになん侍し。

「たけくまの松みせ申せ遅桜」と、挙白と云ものの、餞別したりければ、

桜より松は二木を三月越

【語釈・語り】

人藤原孝義。将また。

【現代語訳】

岩沼に宿す。

武隈の松には、まさに目が覚める心地がする。根は土の際から二木に分かれ、昔の姿を失っていないと知れた。何よりも先に、能因法師が思い出される。その昔陸奥守として当地に下った人が、この木を伐って、名取川の橋杭になさったことなどが、あったからだろうか。能因法師は再訪の際「松は此たび跡もなし」と詠んでいる。代々、あるいは伐り、あるいは植え継ぎなどしたと聞くのに、今はまた千歳の形が調い、見事な松の眺めである。

「武隈の松見せ申せ遅桜」と、挙白と云うものが、餞別に詠んでくれたので、

桜より松は二木を三月越

十八　宮城野

目次へ

【原文】

名取川をわたつて、仙台に入。あやめふく日也。旅宿をもとめて、四五日逗留す。爰に画工加右衛門と云ものあり。聊心ある者と聞て、知る人になる。このもの、「年比さだかならぬ名どころを、考置侍ればとて、一日案内す。宮城野の萩茂りあひて、秋のけしきおもひやらる。玉田、よこ野。つつじがおかは、あせび咲ころ也。日かげも、もらぬ松の林

に入て、「爰を、木の下と云」とぞ。むかしもかく露ふかければこそ、「みさぶらひみかさ」とはよみたれ。薬師堂、天神の御社などおがみて、其日はくれぬ。猶松嶋、塩がまの所どころ、画にかきて送る。且、紺の染緒つけたる草鞋二束、はなむけす。さればこそ、風流のしれもの、爰に至りて其実をあらはす。

あやめ草足に結ん草鞋の緒

彼画図にまかせて、たどり行ば、おくの細道の山際に、十苻の、菅有。今も、年々十苻の菅菰を調て、国守に献ずと云り。

【語釈・語り】

あやめふく日五月四日。聊多少。↓飯塚の宿。末の松山。知る人知人。年比

年来。みさぶらひお供の方。みかさご主人にお笠を。おくの細道書名の由来。

【現代語訳】

名取川を渡って、仙台に入る。あやめを葺く日であった。旅宿を求めて、四五日逗留する。この地に画工の加衛門と云う者がいる。聊か心ある者と聞いて、知り合いになった。この者、「数年来場所の不確かな名所を、調べておきました」と言って、ある日案内してくれた。宮城野の萩は茂り合って、秋の景色に思い遣られる。玉田、横野、つゝじが岡は、あせびが咲く頃である。日の光も洩れない松の林に入りて、「ここが、木の下という所です」と云う。昔もこの様に露が深かったからこそ、「みさぶらひ（お供の方）みかさ（ご主人にお笠を）」と詠んでいるのだ。薬師堂、天神の御社など

拝んで、その日は暮れた。加衛門は、その上に松嶋、塩釜の所々を、画にかいて贈ってくれた。また、紺染めの緒がついている草鞋二足を、餞別にくれた。されば、風流の痴れ者、ここに至ってその本性をあらわした。

あやめ草足に結ん草鞋の緒

あの絵図を頼りに辿って行けば、おくの細道の山際に、十符の菅が見られた。今でも、毎年十符の菅菰を作り、国守に献上しているという。

十九　壷碑

目次へ

【原文】

壷碑　市川村多賀城に有。

つぼの石ぶみは、高さ六尺余、横三尺計歟。苔を穿て文字幽也。四維国界之数里を印。「此城、神亀元年、按察使、鎮守苻将軍、大野朝臣東人之、所置也。天平宝字六年、参議東海東山節度使、同将軍恵美朝臣朝・修造而。十二月一日」と有。聖武皇帝の御時にあたれり。むかしより、よみ置る歌枕、多くかたり伝ふといへども、山崩、川流て、道あらたまり、石は埋て土にかくれ、木は老て若木にかはれば、時移り、代変じて、其跡たしかならぬ事のみ。爰に至りて、うたがひなき、千歳の記念、今眼前に、古人の心を閲す。行脚の一徳、存命の悦び、羈旅の労をわすれて、泪も落るばかり也。

【語釈・語り】

穿て纏っているので。穴を開けるの意

もあるので、「苔に彫られたように」とした。閲す検証する。「見る」より強い。

【現代語訳】

壷碑　市川村多賀城に有。

壷碑は、高さ六尺余り、横は三尺ほどか。苔に彫られたように、文字は幽かである。四方の国境までの里数が記されている。「此城、神亀元年、按察使、鎮守府将軍、大野朝臣東人之、所置也。天平宝字六年、参議東海東山節度使同将軍恵美朝臣朝獦、修造也。十二月一日」とある。聖武皇帝の御代にあたる。

昔から詠み残されている歌枕は、多く語り伝えられているが、山は崩れ、川は流れて、道は改まり、石は埋もれて土に隠れ、木は老いて若木に変われば、時は移り、代が替わって、旧跡は確かではない

ものばかりだ。この碑に至って、疑いようもない、千年の記念、今眼前に、古人の心を確かめる思いだ。行脚の一徳、存命の悦び、旅の労を忘れて、泪も落ちるばかりであった。

二十　末の松山

目次へ

【原文】

それより、野田の玉川、沖の石を尋ぬ。末の松山は、寺を造て、末松山と云。松のあひあひ皆墓原にて、「はねをかはし枝をつらぬる、契の末も、終には、かくのごとき」と、かなしさも増りて、塩がまの浦に入逢のかねを聞。五月雨の空、聊はれて、夕月夜かすかに、籬が島も程ちかし。あまの小舟こぎつれて、肴わかつこゑゑごゑゑに、「綱手かなしも」とよみけむ、歌のこころもしられて、いとど

あはれ也。

其夜、目盲法師の、琵琶をならして、奥上るりと云ものを、かたる。平家にもあらず、舞にもあらず、ひなびたる、調子打上げて、枕ちかう、かしましけれど、さすがに、辺国の遺風、わすれざるものから、殊勝に覚らる。

【語釈・語り】

死ねば墓に帰す。

【現代語訳】

それより、野田の玉川、沖の石を訪ねた。末の松山には寺を造って、末松山と云う。松の間々は全て墓地で、「翼を交わし枝を連ねる、契りの末も、終には、かくのごとき」と、悲しさも増って、塩釜の浦で入相の鐘を聞く。五月雨の空が、

少し晴れて、夕月が幽かに照らし、籬が嶋も間近に見える。漁師の小舟が漕ぎ連なって帰り、魚を分ける声声に、「綱手かなしも」と詠んだ、歌の心も分かり、いっそうしみじみとした趣である。

その夜、盲目の法師が、琵琶を鳴らして、奥浄瑠璃と云うものを語る。平家琵琶の語りでもなく、幸若舞の曲でもない。田舎じみた、調子で声を張り上げ、枕もと近く、やかましいが、さすがに、へんぴな土地に残っている遺風、忘れずに伝えているものだと、殊勝に、感じられた。

二十一　鹽竈神社

目次へ

【原文】

早朝、塩竈の明神に詣。国守再興改られて、宮柱ふとしく、彩椽きらびやかに、石の階、九仞に重り、朝日、あけ

の玉がきをかかやかす。かかる道の果、塵土のさかひまで、神霊あらたにましますこそ、吾国の風俗なれと、いと貴し。神前に、古き宝燈有。かねの戸びらのおもてに、「文治三年和泉の三郎寄進」と有。五百年来の俤、今目の前にうかびて、そぞろに珍し。渠は、勇義忠孝の士也。佳名、今に至りて、したはずと云事なし。誠、人能、道を勤、義を守て、佳名をおもふべし。「名も又これにしたがふ」と云り。

日既、午にちかし。船をかりて、松嶋に渡。其間二里余、雄島の磯につく。

【語釈・語り】

国守伊達政宗。和泉の三郎藤原忠衡。義経に忠誠を尽くす。椽垂木。

【現代語訳】

早朝、鹽竈神社に参詣する。国守が再興修営なさって、宮柱は太く、彩色した垂木はきらびやかに、石段は、極めて高く重なり、朝日が、朱色の玉垣を輝かせている。このような道の果て、国土の境まで、神霊あらたかにましますこそ、吾国の風俗であるとは、まことに尊い。神前に、古い燈篭がある。鉄の扉の面に、「文治三年、和泉の三郎寄進」とあり。五百年来の俤が、目の前に浮かんできて、無性に素晴らしい。和泉の三郎は、勇義忠孝の武士である。佳名は、今に至っても、慕わない者はない。誠に、人は十分に、道をわきまえ、義を守り、名誉を思うべきだ。「名声もまたこれについてくる」と云う。

日はもう、正午に近い。舟を雇って、

松島に渡る。その間二里あまり、雄嶋の磯に着く。

二十二　松島

目次へ

【原文】

抑松嶋は、扶桑第一の好風にして、をよそ、洞庭、西湖を恥ず。

東南より、海を入て、江の中三里、浙江の、潮をたたふ。嶋々の数を尽して、欹ものは天を指、ふすものは波に匍匐。あるは二重にかさなり、三重に畳て、左にわかれ、右につらなる。負るあり抱るあり。児孫愛すがごとし。松のみどりこまやかに、枝葉、汐風に吹たはめて、屈曲をのづから、ためたるがごとし。其気色窅然として、美人の、顔を粧ふ。千早振神のむかし、大山ずみの、なせるわざにや。造化の天工、いづれの人か、

筆をふるひ、詞を尽さむ。

雄島が磯は地つづきて、海に成出たる島也。雲居禅師の別室の跡、坐禅石など有。将、松の木陰に、世をいとふ人も、稀々見え侍りて、落ぼ、松笠など、打煙たる、草の庵、閒に住なし、いかなる人とはしられずながら、先なつかしく立寄ほどに、月海に移りて、昼のながめ、又あらたむ。

江上に帰りて、宿を求れば、窓を開、二階を作りて、風雲の中に旅寐するこそ、あやしきまでたへなる心地はせらるれ。

松嶋や鶴に身をかれほととぎす　曾良

予は、口をとぢて、眠らんとして、いねられず。旧庵をわかるる時、素堂、松嶋の詩有。

原安適、松がうらしまの和歌を送らる。

袋を解(とき)て、こよひの友とす。且(かつ)、杉風(さんぷう)、濁子(じょくし)、発句あり。

【語釈・語り】

雄嶋(おじま)の磯(いそ)に着くまでの船上からの光景。舟が進むにつれて変化する景観を描写。扶桑(ふそう)日本。好風(こうふう)よい景色。をよそおそらく。数を尽して全てを集めて。畳(たたみ)て積み重なる。筆絵筆。移(うつ)り映りとも。真筆の移りをとった。たへなる妙なる。口をとぢて句を詠むのを断念して。詩漢詩。

【現代語訳】

そもそも、松島は、日本一の美景で、おそらく、洞庭(とうてい)、西湖(せいこ)と比べても恥じることはない。

東南より、海を入(い)れて、湾の中は三里あり、浙江(せっこう)のように、潮(うしお)を湛(たたえ)えている。島々のある限りを集めて、聳(そばだ)つものは天

を指し、伏すものは波に腹這っている。あるいは二重にかさなり、三重に畳まれ、左に分かれ、右に連なっている。背負うものあり、抱くものあり。子や孫を愛しているようだ。松の緑は色濃く、枝葉は、潮風に吹き曲げられ、屈曲は自然のままに、誰かが美しく曲げたようだ。その風情は見る人を恍然とさせ、美人が、顔を化粧したようだと。千早振神の昔、大山祇神が、なされた仕業なのだろうか。造物主の天の仕業を、誰が、筆をふるい、言葉を尽くすことができようか。

雄嶋が磯は地つづきに、海に突き出した島である。雲居禅師の別室の跡や、坐禅石などがある。又、松の木陰に、隠棲している人の姿も、ごく希に見え、落穂、松笠などの炊事の煙が、うっすらと煙っていて、草の庵に、閑静に住みなしている様子、どのような人とは知らないなが

ら、何より先に心をひかれて立ち寄るうちに、月は海に移り、昼の眺めが、すっかり変わった。

海辺に帰って、宿を求めると、海に面して窓を開いた、二階作りで、風雲の中に旅寝するのは、不思議なほど妙なる気持がするのだった。

松嶋や鶴に身をかれほととぎす　曾良

予は、口を閉じて、眠ろうとするが、眠ることができない。芭蕉庵を離れる時、素堂が、松島の詩を作ってくれた。原安適は、松が浦島の和歌を贈ってくだされた。袋の紐を解き、今宵の友とする。それに加えて、杉風、濁子の発句があった。

二十三　瑞岩寺

目次へ

【原文】

十一日、瑞岩寺に詣。当寺、三十二世の昔、真壁の平四郎、出家して入唐、帰朝の後、開山す。其後、雲居禅師の徳化に依て、七堂、甍改りて、金壁荘厳、光を輝、仏土成就の大伽藍とはなれりける。彼見仏聖の寺は、いづくにやと、したはる。

【語釈・語り】

荘厳仏像や仏堂を飾ること，またその装飾具（荘厳具）。

【現代語訳】

十一日、瑞岩寺に参詣する。この寺の三十二代目の昔、真壁の平四郎が、出家して唐に渡り、帰朝の後開山した。其後、

雲居禅師の徳化によりて、七堂の甍が改築され、金色の壁や仏像の飾りを光り輝かせ、仏の住む世界の現出した大伽藍となったのである。又、かの見仏聖の寺は、何処にと慕われる。

二十四　石の巻

目次へ

【原文】

十二日、平和泉と、心指、あねはの松、緒だえの橋など、聞伝えて、人跡、稀に、雉兎、蒭蕘の往かふ道、そこ共わかず。終に、道ふみたがえて、石の巻といふ湊に出。「こがね花咲」と、よみて奉りたる金花山、海上に見渡、数百の廻船、入江につどひ、人家、地をあらそひて、竈のけぶり立つづけたり。「おもひがけず、かかる処にも、来れる哉」と、宿からんとすれど、更宿かす人なし。漸々、

まどしき小家に一夜をあかして、明れば、又しらぬ道まよひ行。袖のわたり、尾ぶちの牧、まののかやはらなど、よそめにみて、はるかなる堤を行。心ぼそき長沼にそふて、戸伊摩と云所に一宿して、平泉に至る。其間二十余里程と覺ゆ。

【語釈・語り】

蒭蕘樵。わかず分ず。更どこにも。わたり渡し。はるかなる果てしない。心ぼそき（何処まで続くのかと）。

【現代語訳】

十二日、平泉へと心に決め、あねはの松、緒だえの橋などを、人づてに聞いて、人跡希で、猟師や樵の行き交う道に、どことも見分けがつかない。ついに、道を間違えて、石の巻と云う湊に出た。大伴家持が「こがね花咲」と、詠んで帝に

奉つた金花山を海上に見渡し、一方、数百の廻船が、湾内に集まり、人家が地を争って、竈の煙が立ち続けている。

「思いがけず、このような処に来てしまったなあ」と、宿を借りようとするのだが、どこにも宿を貸す人はない。やっと、貧しい小さな家で一夜を明かして、明ければ、又知らない道を迷い行く。袖の渡り、尾ぶちの牧、真野の萱原などを、よそ目に見て、遥かに続く堤を行く。どこまで続くのかと心細い長い沼に沿って行き、戸伊摩と云う所に一泊して、平泉に着いた。その間、二十余里ほどと思われた。

二十五　平泉

目次へ

【原文】

三代の栄耀、一睡の中にして、大門の

跡は、一里こなたに有。秀衡が跡は、田野になりて、金鶏山のみ形を残す。

先、高館にのぼれば、北上川、南部より流るる大河也。衣川は、和泉が城をめぐりて、高館の下にて大河に落入。泰衡等が旧跡は、衣が関を隔て、南部口を指かため、えぞをふせぐと見えたり。扨も、義臣すぐつて此城に籠り、功名、一時の草村となる。「国破れて山河あり、城春にして青々たり」と、笠打敷て、時のうつるまで、なみだを落し侍りぬ。

夏艸や兵共が夢の後

卯花に兼房みゆる白毛哉　　曾良

兼て耳驚したる二堂、開帳す。経堂は三将の像を残し、光堂は三代の棺を納、三尊の仏を安置す。七宝散うせて、

玉の扉、風に破れ、金の柱、霜雪に朽て、既、頽廃空虚の草村となるべきを、四面、新に囲て、甍を覆て風雨を凌、暫時、千歳の記念とはなれり。

五月雨や年々降て五百たび
蛍火の昼は消つ々柱かな

【語釈・語り】

功名（主従の過去の）功名。暫時少しの間。千歳と対をなす。

【現代語訳】

三代の栄華も一睡の中で、表門の跡は、一里も手前にある。秀衡の館跡は、田野になって、金鶏山のみが形を残している。

何よりも先に、義経ゆかりの高館に登ると、北上川は、南部藩の領地から流れ

てくる大河である。衣川は、和泉が城の周りを流れ、高館の下で大河に落ちる。泰衡達の屋敷跡は、衣が関を隔てた処にあり、南部口を堅く守り、蝦夷を防いだと見られる。さても、義経が義臣を選りすぐりこの高館の城に籠り、（過去に）競った功名も、一時の夢と消え叢となる。「国破れて山河あり。城春にして青々たり」と、笠を敷いて腰を下ろし、時の移るまで、泪を落とした。

夏草や兵共が夢の跡

卯の花に兼房みゆる白毛哉　　曾良

かねてから聞いて驚嘆していた二堂を、開帳する。経堂は三将の像を残し、光堂はこれら三代の棺を納め、三尊の仏を安置する。七宝は散り失せて、珠玉の扉

は、風に破れ、金の柱は、霜雪に朽て、もはや、頽廃空虚の叢となる筈だったのを、四面を新たに囲んで、甍を覆いて風雨を凌ぎ、暫くは、千載の記念となっている。

五月雨や年々降て五百たび

蛍火の昼は消つゝ柱かな

西村本

五月雨の降のこしてや光堂

二十六　尿前

目次へ

【原文】

南部道はるかに見やりて、岩手の里に泊る。小黒崎、水の小嶋を過て、なるごの湯より、尿前の関にかかりて、出羽の

国に、越むとす。此道、旅人稀なる処なれば、関守にあやしめられて、漸にして関をこす。大山をのぼつて、日既暮れば、封人の家を見かけて、舎を求。三日風雨あれて、よしなき山中に逗留す。

蚤虱馬の尿する枕もと

あるじの云、「これより出羽の国に、大山を隔て、道さだかならざれば、道しるべの人を頼みて越べき」よしを申。「さらば」と云て、人を頼侍れば、究竟の若もの、脇指をよこたえ、樫の杖を携て、我々が先に立て行。「けふこそ、必あやうきめにも、あふべき日なれ」と、辛きおもひをなして、後について行。あるじの云にたがはず、高山森々として一鳥声きかず、木の下闇、茂りあ

ひて、夜行がごとし。雲端に土ふる心地して、篠の中、踏分々、水をわたり、岩につまづいて、肌につめたき汗を流して、最上の庄に出。彼、案内せし、おのこの云やう、「この道、必、不用の事有。つつがなう送りまいらせて、仕合したり」と、よろこびてわかれぬ。跡に聞てさへ、胸とどろくのみ也。

【語釈・語り】

「南部道はるかに見やりて」にはもっと北へ行きたかった気持が込められている。旅は日本横断、宮城から山形への越境へと。封人国境を守る役人。よしなき（歌枕もない）。

【現代語訳】

北の方南部地方へと続く街道を遥かに眺めやりつつ、岩手の里に泊まる。小黒

崎、美豆の小嶋を過て、鳴子の湯より、尿前の関にさしかかって、出羽の国へ越えようとする。この道は、旅人が希な処だから、関守に怪しまれ、やっとのことで関を越えた。大山を登っていくうち、日はすでに暮れたので、国境の番人の家を目当てに、宿りを求めた。三日間風雨が荒れて、つまらない山中に逗留する。

蚤虱馬の尿する枕もと

主が云うには、「ここから出羽の国までには、大きな山が間にあり、道もはっきりしていないので、道案内の人を頼んで越えるべきです」との旨を申す。「それならば」と云って、人を頼むと、屈強な若者が、脇差を横たえ、樫の木を携えて、我々の先に立って行く。「今日こそ、きっとあぶない目にあう日だ」と、悲痛

な思いで、後ろについて行く。主の云ったことに違わず、高山は森々として、鳥の声一つ聞こえず、木の下闇は、生い茂りあって、夜道を行くようだ。杜甫の「雲端に土降る」心地がして、笹藪を踏分踏分、水を渡り、岩につまずいて、冷や汗を流して、最上の庄に出た。あの、案内してくれた男が云うには、「この道では、必ずよくないことがあります。何もなくお送りできて、幸いでした」と、喜んで別れていった。後になって聞いてさえ、胸がどきどきするばかりだった。

二十七　尾花沢

目次へ

【原文】

尾花沢にて、清風と云ものを尋ぬ。かれは、富るものなれども、心ざし、さすがにいやしからず。都にも折々かよひて、

旅の情をもしりたれば、日比とどめて、長途のいたはり、さまざまにもてなし侍る。

涼しさを我宿にしてねまる也

這出よかひやが下のひきの声

まゆはきを俤にして紅粉の花

蚕飼する人は古代の姿哉　　曾良

【語釈・語り】

「さすがに旅の情を」と改稿している。「さすがにいやしからず」はさすがに現代語訳しにくかった。日比何日も。

【現代語訳】

尾花沢で、清風と云うものを訪ねた。彼は、裕福だが、志は、そうはいってもやはり卑しさがない。都にも時々行き来して、旅の心情を知っているので、何日も引き留めて、長い道中をねぎらい、色々ともてなしてくれる。

涼しさを我宿にしてねまる也

這出よかひやが下のひきの声

まゆはきを俤にして紅粉の花

蚕飼する人は古代の姿哉　　曾良

二十八　立石寺　目次へ

【原文】

山形領に、立石寺と云山寺有。

慈覚大師の開基にして、殊清閑の地也。一見すべきよし、人々のすすむるに仍て、尾花沢より、とつて返し、其間七里計也。日、いまだ暮ず。麓の坊に宿かり置て、山上の堂に登。岩に巌を重て山とし、松栢年ふり、土石老て、苔なめらかに、岩上の院々扉を閉て、物の音きこへず。岸をめぐり、岩を這て、仏閣を拝し、佳景、寂寞として、こころすみ行のみ覺ゆ。

閑さや岩にしみ入蝉の声

【語釈・語り】

とつて返し引き返し。院々本寺に属する寺院。岸崖。英訳する時に蝉は単数か複数か問題になるそうです。

【現代語訳】

山形領に立石寺と云う山寺がある。慈覚大師の開基で、とりわけ清閑な地である。一見すべしと、人々が勧めるので、尾花沢から引き返したが、その間は七里ほどであった。日はまだ暮れていない。麓の宿坊に宿を借りておいて、山上の堂に登る。岩に巌を重ねて山とし、松柏は年代を経て、土石も老いて、苔が滑らかで、岩の上の多くの支院は扉を閉じて、物の音一つ聞こえない。絶壁を廻り、岩を這って、仏閣を拝めば、佳景は、寂寞として、心が澄んで行くのだけが感じられる。

閑さや岩にしみ入蝉の声

二十九　最上川

目次へ

【原文】

もがみ川乗らんと、大石田と云処に、日和を待。爰に、古き俳諧のたね、落こぼれて、わすれぬ花のむかしをしたひ、芦角一声の心をやはらげ、此道にさぐりあしして、新古ふた道にふみまよふといへども、道しるべする人しなければと、わりなき一巻を残しぬ。このたびの風流、爰にいたれり。

最上川は、みちのくより出て、山形を水上とす。ごてん、はやぶさなど云、おそろしき難所有。板敷山の北を流て、果は、酒田の海に入。左右、山おほひ、茂みの中に船を下。これをいなふねと云。白糸の滝は、青葉の隙々に落て、仙人堂、岸に臨て立。水みなぎつて、舟あやうし。

さみだれをあつめて早し最上川

【語釈・語り】

乗らんと舟に乗ろうと。

ここは難しいです。主語を補います。（大石田の人は）わすれぬ花の。（俳諧は）芦角一声の。（大石田の人は）此道に。しは強調。わりなきやむにやまれず。いなノン。「もがみ川のぼればくだるいな舟のいなにはあらず此月ばかり」古今集。いやではないが今月は待って欲しい。芭蕉は古今集を洒落ています。

【現代語訳】

最上川を舟で下ろうと、大石田というところで日和を待つ。かってこの地に、古い俳諧の種が落ちこぼれ、それが実って、盛んに詠まれた忘れられない花の昔を慕い、葦笛の響きのような田舎人の心を和らげつつ、俳諧の道に探り足をして、新旧二つの俳諧の道に踏み迷っているのだが、指導する人もいないので、是非に

ということで、やむにやまれず一巻を残した。この度の俳諧風流は、この一巻に極まったかの感がある。

最上川は、陸奥より出て、山形領を上流とする。碁点、隼などと云う、恐ろしい難所がある。板敷山の北を流て、果は、酒田の海に入る。左右は山が覆い、茂みの中に船を下す。これを稲舟と云う。白糸の瀧は、青葉の隙間隙間に落ちて、仙人堂は、川岸に臨んで建っている。水はみなぎって、舟は危ない。

さみだれをあつめて早し最上川

三十　出羽三山

目次へ

【原文】

六月三日、羽黒山に登る。図司左吉と云ものを尋て、別当代会覚阿闍梨に謁す。

南谷の別院に舎して、憐愍の情こまやかに、あるじせらる。

四日、於本坊、俳諧興行。

有難や雪をかほらす南谷

五日、権現に詣。当山開闢、能除大師は、いづれの代の人と云事をしらず。延喜式に、「羽州里山の神社」と有。書写、「黒」の字、誤て「里山」となせるにや。「羽州黒山」を中略して、「羽黒山」と云にや。月山、湯殿を合て、三山とす。当寺、武江東叡に属して、天台止観の月明らかに、円頓融通の法の燈かかげそひて、僧坊、棟をならべ、修験行法を励し、霊山霊地の校験、人貴、且、恐。繁栄長にして、目出度御山と可謂。

八日、月山に登に、木綿しめ身に引かけ、宝冠に頭を包、強力と云ものに道びかれて、雲霧山気の中に、氷雪を踏て、のぼる事八里、更に、日月行道の雲関に入かとあやしまれ、息絶、身こごえて、頂上に至れば、日没て、月あらはる。笹を鋪、篠を枕として、臥て、明るを待。日出て、雲消れば、湯殿に下る。

谷の傍に、鍛冶小屋と云有。此国の鍛冶、霊水を撰て、爰に潔斎して、剱を打、終、月山と銘を切て、世に賞せらる。彼、竜泉に剱を淬とかや、干将莫耶の昔をしたふ。道に堪能の、執あさからぬ事、しられたり。岩に腰かけて、しばしやすらふ程、三尺計なる桜の、つぼみ半にひらけるあり。ふり積雪の下に埋て、はるを忘れぬ遅桜の花の心、わりなし。炎天の梅花、爰にかほるがごとし。行尊親王の歌の哀も、増りて覚ゆ。

惣而、此山中の微細、行者の法式として、他言する事を禁ず。仍て、筆をとどめて、しるさず。　坊に帰れば、阿闍梨の求に仍て、三山順礼の句々、短尺に書。

涼しさやほの三か月の羽黒山

雲の峯幾つ崩て月の山

語られぬ湯殿にぬらす袂哉

湯殿山銭ふむ道のなみだ哉　　曾良

【語釈・語り】

権現羽黒権現。しらず分からない。

鍛冶小屋頂きから西へ300mほど下ったところにあった小屋。谷と言うので麓や低い場所を想像したが、まだ、高山である。

桜高山帯に咲く高嶺桜（ミネザクラ）。
遅桜の生命力。

【現代語訳】

六月三日、羽黒山に登る。図司左吉という者を訪ねて、別当代会覚阿闍利に拝謁する。南谷の別院に宿泊して、あわれみの情細やかに、持てなしてくださった。

四日、本坊で、誹諧興行。

有難や雪をかほらす南谷

五日、羽黒権現に参詣する。当山開山の能除大師は、いつの時代の人か明らかでない。延喜式に、「羽州里山の神社」とある。書写の際に、「黒」の字を、間違って「里山」としたのだろうか、「羽州黒山」を中略して、「羽黒山」と云うのだろうか。月山、湯殿を合て、三山と

する。この寺は、武蔵国江戸の東叡山に属して、天台宗の止観の教えが曇りなき月のように行き渡り、円頓融通の法統を盛んに継承して、僧坊が、棟を並べ、修験者が、行法に励み、霊山霊地の効験を人は貴び、かつ、畏れる。繁栄は永遠で、目出度御山というべきである。

八日、月山に登るのに、木綿注連を首にかけ、宝冠で頭を包み、強力と云う者に先導されて、雲や霧の立ちこめる山気の中、氷雪を踏んで、登ること八里、まさに、日月の運行出入りする雲の関所に入ったのかと怪しく、息も絶え絶えに、冷え切った身体で、頂上に到着すると、日は没し、月が現れた。笹を敷き、篠を枕として、横になって、夜が明けるのを待つ。日が出て、雲が消えたので、湯殿山へと下る。

途中、谷の一隅に、鍛冶小屋と云う所がある。この国の刀鍛冶が、霊水を選び、この地に心身を清めて、剣を打ち、ついに、月山と銘を刻み、世に賞賛された。かの、龍泉の水を選んで剣を鍛えた故事に通じるものだろうか、干将と妻莫耶の昔を慕うものであり、道を究める堪能の執念が浅からぬことが分かる。岩に腰かけて、しばらく休んでいると、三尺ほどの桜の蕾が、半分ほど開いていた。降り積もる雪の下に埋もれても、春を忘れない遅桜の花の心は、やむにやまれぬものがある。禅宗の炎天の梅花が、ここに香っているかのようだ。行尊親王の歌の心も、よりしみじみと感じられる。全て、この湯殿山中での細かいことは、行者の掟として、他言することを禁じている。よって、筆を留めて、記さない。

宿坊に帰れば、阿闍梨の求めによって、

三山順礼の句々を、短尺に書く。

涼しさやほの三か月の羽黒山

雲の峯幾つ崩て月の山

語られぬ湯殿にぬらす袂哉

湯殿山銭ふむ道のなみだ哉　　曾良

三十一　酒田

目次へ

【原文】

羽黒を立て、鶴が岡の城下、長山氏重行と云もののふの家にむかへられて、俳諧一巻有。左吉も、共に送りぬ。川舟に乗て、酒田のみなとに下。淵庵不玉と云医師の許を宿とす。

あつみ山や吹浦かけて夕すずみ

暑き日を海に入れたる最上川

【語釈・語り】

左吉前段の図司左吉。ついてきていたのですね。

【現代語訳】

羽黒を立ち、鶴が岡の城下の、長山氏重行と云う武士の家に迎えられて、誹諧一巻を巻く。佐吉も、一緒に送ってくれた。川舟に乗って、酒田の湊に下る。淵庵不玉と云う医師の家を宿とする。

あつみ山や吹浦かけて夕すずみ

暑き日を海に入れたる最上川

西村本

暑き日を海に入れたり最上川

三十二　象潟

目次へ

【原文】

江山水陸の風光、数を尽して、今、象潟に方寸を責。

酒田の湊より、東北の方、山を越、礒をつたひ、いさごを踏て、其際十里、日影ややかたぶく比、汐風、真砂を吹上、雨、朦朧として鳥海の山かくる。闇中に莫作して、「雨も又、奇也」とせば、「雨後の晴色、又頼母敷」と、蜑の苫屋に膝をいれて、雨の晴るるを待。

其朝、天能晴れて、朝日花やかにさし出る程に、象潟に舟をうかぶ。先、能因嶋に舟をよせて、三年幽居の跡をとぶらひ、むかふの岸に舟をあがれば、「花の

上こぐ」とよまれし桜の老木、西行法師の記念を残。江上に御陵あり。神功皇宮の御墓と云。寺を干満珠寺と云。この処に御幸ありし事、いまだきかず。いかなる故ある事にや。

此寺の方丈に坐して、簾を捲ば、風景、一眼の中に尽て、南に、鳥海、天をささへ、其陰うつりて　江に有。西は、むやむやの関路をかぎり、東に、堤を築て、秋田にかよふ道遙に、海北にかまへて、浪打入るる処を汐ごしと云。江の縦横、一里ばかり、俤松嶋にかよひて、又異なり。松しまは、わらふがごとく、象潟は、うらむがごとし。さびしさに、かなしびをくはえて、地勢、魂をなやますに似たり。

象潟や雨に西施がねぶの花

汐越や鶴はぎぬれて海涼し

祭礼　曽良

象潟や料理何くふ神祭

美濃国商人低耳

蜑の家や戸板を敷て夕涼

岩上に雎鳩の巣を見る　曽良

波こえぬ契ありてやみさごの巣

【語釈・語り】

方寸心臓（こころ）。いさご砂。「浜のいさご云々」って聞いたことがあるような。際間。今の象潟は水田に丘が点在している。うらむ悲しむ。

象潟や雨に西施がねぶの花

おくのほそ道で私の一番好きな俳句です。何でだろ？　にとがが何とも言えません。

【現代語訳】

江山水陸の美景の、ある限りを見て来て、今や、象潟に詩心を苦しめる。

酒田の湊から、東北の方へ、山を越え、磯を伝い、砂を踏んで、その間十里、日もようやく傾く頃、潮風が砂を吹き上げ、雨は、朦朧とけぶって、鳥海の山も隠れてしまった。闇中に模索して、「象潟の雨もまた奇なり」とすれば、「雨後の晴れた景色は、又期待される」と、漁師の苫ぶきの小屋に膝を入れるようにして、雨が上がるのを待つ。

その翌朝、空はよく晴れて、朝日がはなやかにさし出る頃に、象潟に舟を浮か

べた。何はともあれ、能因嶋に舟をよせて、能因法師が三年間隠栖した跡を尋ね、向こうの岸に舟を上がれば、「花の上こぐ」とお詠みになった桜の老木が、西行法師の記念を残している。水辺に御陵がある。神功后宮の御墓と云う。寺を干満珠寺と云う。ここに皇后が御幸されたことは、聞いたことがない。どういういわれがあるのだろうか。

この寺の方丈に坐して、簾を巻けば、風景は、一望のうちに尽きて、南に、鳥海山が、天を支えるように聳え、その影が映って、水上にある。西には、むやむやの関が道を遮り、東は、堤を築いて、秋田に通う道が遥かに続き、海を北に控えて、波が打ち越して入る所を汐越と云う。入江の縦横は、一里ほどで、俤は松島に似通っていて、また異なっている。松島は笑うが如く、象潟は憂える如し。

寂しさに、悲しみを加えて、その地のありさまは、心を悩ます美女の姿に似ている。

象潟や雨に西施がねぶの花

汐越や鶴はぎぬれて海涼し

祭礼　　曾良

象潟や料理何くふ神祭

美濃国商人低耳

蜑の家や戸板を敷て夕涼

岩上に雎鳩の巣を見る　　曾良

波こえぬ契ありてやみさごの巣

三十三　越後

目次へ

【原文】

酒田の余波、日を重て、北陸道の雲に望。遥々のおもひ、胸をいたましめて、加賀の府まで百三十里と聞。鼠の関をこゆれば、越後の地に歩行を改て、越中の国、一ぶりの関に至。此間九日、暑湿の労に神をなやまし、病をこりて、事をしるさず。

文月や六日も常の夜には似ず

荒海や佐渡によこたふ天河

【語釈・語り】

帰り道は遠かった。

【現代語訳】

酒田の名残惜しさに、日を重ねていたが、北陸道の雲に向かって旅立つ。前途は遥かに遠いという思いが、心を悲しませ、加賀の国府まで百三十里と聞く。鼠の関を越えると、出羽の国から越後の地へと歩を改めて、越中の国、市振の関に着いた。この間九日、暑さと雨の苦労に心気を疲れさせ、病気が起こって、道中の出来事を記さず。

文月や六日も常の夜には似ず

荒海や佐渡によこたふ天河

三十四　市振

目次へ

【原文】

けふは、親しらず、子しらず、犬もど

り、駒返しなど云、北国一の難所を越て、つかれ侍れば、枕引よせて寝たるに、一間隔て面の方に、若きをんなの声、二人計ときこゆ。年老たるおのこの声も交て、物語するをきけば、越後の国新潟と云処の、遊女成し、伊勢に参宮するとて、此関までおのこの送りて、あすは古里にかへす文したため、はかなき言伝などしやる也。「白浪のよする汀に身をはふらかし、あまのこの、世をあさましう下りて、定めなき契、日々の業因、いかにつたなし」と物云を、聞く聞く寝入て、あした旅だつに、我々にむかひて、「行末しらぬ旅路のうさ、あまり覚束なう、悲しく侍れば、見えかくれにも、御跡をしたひ侍らん。衣の上の御情に、大慈のめぐみをたれて、結縁せさせ給へ」と、なみだを落す。不便の事には、おもひ侍れ共、「我々は、所々にて、

とどまる方おほし。唯、人の行にまかせて行べし。神明の加護、必つつがなかるべし」と云捨て出つつ、あはれさ、しばらくやまざりけらし。

一家に遊女も寝たり萩と月

曾良にかたれば、書とどめ侍る。

【語釈・語り】

けふは市振の関に着いた日。一間襖一重。也伝聞推定の助動詞。

【現代語訳】

今日は、親知らず、子知らず、犬戻り、駒返しなどという、北国一の難所を越えて、疲れたので、枕を引き寄せて寝たところ、襖一重隔てた表の方で、若い女の声、それも二人と思われる声が聞こえる。

年老いた男の声も交じって、話し合うのを聞くと、越後の国新潟と云う所の遊女で、伊勢に参宮するので、この関まで男が送ってきて、明日はその男に託ける古里に返す手紙を書き、とりとめもない伝言などしてやっているようだ。「白浪が打ち寄せる汀に身を投げ捨て、漁師の子のように、この世を情けない境遇に落ちぶれ果てて、夜毎に変わるはかない契り、毎日毎日の前世の因縁は、どんなに悪かったのだろう」と、話すのを、聞きながら眠り、翌朝旅立つ際に、我々に向かって、「行く先も分からない旅の心細さ。あまりに不安で、悲しゅうございますので、見え隠れにも、御跡について行きとうございます。法衣をお召しのお情けに、御仏の大慈のお恵みをお分かち下されて、仏縁を結ばせてください」と涙を落とす。かわいそうなことと思ったけれど、

「我々は、あちこちに、逗留する先も多い。ただ、同じ方向に旅する人々の行くのにまかせて行きなさい。伊勢大神宮の加護で、きっと無事に着くでしょう」と言い捨てて出発したものの、哀れさが、しばらくやまないことだった。

一家に遊女も寝たり萩と月

西村本

一家に遊女も寝たり萩と月

曽良に語れば、書きとどめた次第である。

三十五　那古　目次へ

【原文】

「くろべ四十八ヶ瀬」とかや、数しらぬ

川をわたりて、那古と云浦に出。担籠の藤浪は、春ならず共、「初秋のあはれとふべきものを」と、人に尋れば、「是より五里、磯づたひして、むかふの山陰に入、蜑の芦ぶき、かすかなれば、一夜の宿かすもの、あるまじ」と、云おどされて、かがの国に入。

わせの香や分入右は有そ海

【語釈・語り】

かすか粗末。

【現代語訳】

黒部四十八が瀬とかいう、数も知れぬほどの川を渡って、那古と云う海辺に出た。担籠の藤浪は、春でなくても、「初秋の趣は尋ねるべきものを」と、人に聞いてみると、「ここから五里、磯

伝いに行って、向こうの山陰に入ったところで、漁師の芦ぶきの小屋が、粗末なものだから、一夜の宿を貸す者はありませんよ」とおどかされて、加賀の国に入る。

わせの香や分入右は有磯海

三十六　金沢

目次へ

【原文】

卯の花山、くりからが谷をこえて、金沢は、七月中の五日也。爰に、大坂よりかよふ商人、何処と云ものあり。それが、旅宿をともにす。

一笑と云ものは、此道にすける名の、ほのぼの聞へて、世に知人も侍しに、去年の冬、早世したりとて、其兄、追善を催に、

塚もうごけ我泣声は秋の風

ある草庵にいざなはれて、

秋すずし手毎にむけや瓜茄子

途中吟

あかあかと日は難面も秋の風

小松と云処にて

しほらしき名や小松吹萩薄

【語釈・語り】

すける好ける。熱心。名評判。ほのぼのほのかに。知人知人。

【現代語訳】

卯の花山や、倶利伽羅が谷を越えて、金沢に着いたのは、盆の七月中の五日であった。この地に、大坂から通っている商人で何處と云う者がいる。かれの、旅宿に同宿した。

一笑と云う者は、俳諧の道に熱心だという評判が、いささか知れていて、世に知友もいたのだが、去年の冬に早世してしまったとのことで、その兄が、追善の句会を催したので、

塚もうごけ我泣声は秋の風

ある草庵に誘われて、

秋すずし手毎にむけや瓜茄子

途中の句

あかあかと日は難面も秋の風

小松と云処にて

しほらしき名や小松吹萩薄

三十七　太田の神社

目次へ

【原文】

此所、太田の神社に詣。斎藤別当真盛が甲、錦の切あり。其昔、源氏に属せし時、義朝公より給はらせ給とかや。げにも、平士のものにあらず。目庇より吹返しまで、菊から艸のほりもの、金をちりばめ、竜頭に鍬形打たり。真盛討死の後、木曾義仲、願状にそへて、此社に、こめられ侍るよし、樋口の次郎

が、使せし事共、まのあたり、縁起に見えたり。

むざんやな甲の下のきりぎりす

【語釈・語り】

下（の薄暗がりのあたりの）。甲に閉じ込められていると思っていた人はいませんか？　俺だけか……。

【現代語訳】

この地の、太田の神社に参詣した。斎藤別当真盛の甲と、錦のきれはしがある。その昔、源氏に属していた時、義朝公より下賜され給うたとか。いかにも平士のものではない。目庇から吹返しまで、菊唐草模様の彫りものに、金をちりばめ、龍頭に鍬形が打ってある。真盛の討死の後、木曾義仲が、戦勝祈願状に添

えて、この社に奉納されたということ。樋口の次郎が、その使者となったことなどが、まざまざと、縁起に記されている。

むざんやな甲の下のきりぎりす

三十八　那谷

目次へ

【原文】

山中の温泉に行ほど、白根が嶽、跡に見なしてあゆむ。左の山際に観音堂有。花山の法皇、三十三所の順礼とげさせ給ひて後、大慈大悲の像を安置し給ひて、那谷と名付給ふと也。那智、谷汲の、二字をわかち侍しとぞ。奇石さまざまに、古松植ならべて、萱ぶきの小堂、岩の上に造りかけて、殊勝の土地也。

石山の石より白し秋の風

【語釈・語り】

三十三所の順礼の一番は那智。一番だけ参りました。

【現代語訳】

山中の温泉に行く途中、白根が嶽を後方に見るように歩む。左の山際に観音堂がある。花山の法皇が、三十三所の順礼を果たされた後、大慈大悲の観世音菩薩の像を安置され、那谷と名づけられたということである。那智と谷汲の二字を分けて命名されたという。奇石をさまざまに積み、老松を植え並べて、萱ぶきの小堂を、岩の上に懸造にして、殊勝の土地である。

石山の石より白し秋の風

三十九　山中　目次へ

【原文】

温泉に浴す。其功、有間に次と云。

山中や菊はたをらぬ湯の匂

あるじとするものは、久米之助とて、いまだ小童也。かれが父、俳諧を好て、洛の貞室、若輩のむかし爰に来りし比、風雅に辱られて、洛に帰りて、貞徳の門人となって、世にしらる。功名の後、此一村、判詞の料を請ずと云。今更、むかし物がたりとはなりぬ。

曾良は、腹を病て、伊勢の国、長嶋と云処に、ゆかりあれば、先立て旅立行に、

ゆきゆきて倒れ伏すとも萩の原　曾

良

と書置たり。行ものの悲しみ、残るものの
のうらみ、隻鳧のわかれて、雲にまよふ
がごとし。予も又、

けふよりや書付消さん笠の露

【語釈・語り】

風雅俳諧。辱られ「あれ、字余りで、
んな」とか。うらみ残念さ。

【現代語訳】

温泉に浴する。その効能は、有馬に次
ぐと云う。

山中や菊は手折らぬ湯の匂

泊まっている宿の主は、久米之助とい

い、まだ少年である。彼の父は、俳諧を好み、京の貞室が、若輩の昔この地にやって来た頃、この父親に俳諧上の辱めを受け、京に帰って、貞徳の門人となり、世に知られるようになった。名をなした後も、この一村からは、俳諧の指導料を申し受けなかったという。今となっては、昔話になったが。

曽良は腹を病んで、伊勢の国の長嶋と云う所に、縁故があるので、先に旅立つにあたり、

ゆきゆきて倒れ伏すとも萩の原　　曾良

と書き残した。行く者の悲しみ、残る者の残念さ、対の鳧が別れて、雲に迷うようである。予も又、

今日よりや書付消さん笠の露

四十　全昌寺

目次へ

【原文】

大聖持の城外、全昌寺と云寺に泊る。猶、加がの地也。曾良も、前の夜、此寺に泊りて、

終夜秋風聞やうらの山

と残。一夜の隔、千里におなじ。我も、秋風を聴きて、衆寮に臥。明ぼのの空ちかふ、読経聞ゆるに、板鐘鳴て、食堂に入。けふは越前の国へと、心早卒にして、堂下に下。若き僧共、紙硯をかかへて、階のもとまで追来。折節、庭中の柳散れば、

庭掃て出ばや寺に散柳

とりあへぬ一句、草鞋ながら書捨

【語釈・語り】

衆寮禅宗寺院の寮舎。早卒あわただしい。芭蕉は有名人ですね。殺生石・遊行柳の段に、馬を引く男に短尺を乞われた話がありました。

【現代語訳】

大聖持の城外にある、全昌寺と云う寺に泊まる。まだ、加賀の地である。曽良も、前の夜、この寺に泊まって、

終夜秋風聞やうらの山

と残す。一夜の隔たりは、千里に同じ。吾も、秋風を聞きて、修行僧の寮舎に臥す。明け方の空も近く、読経が聞こえる

うちに、鐘板が鳴って、食堂に入る。今日は越前の国へと、心もあわただしく、堂の下に降りる。若い僧たちが、紙や硯を抱えて、階段のたもとまで追いかけてきた。折しも、庭の柳が散っていたので、

庭掃て出ばや寺に散柳

とりあえずの一句を、草鞋ばきのまま書き流した。

四十一　汐越の松　天竜寺　永平寺

目次へ

【原文】

越前の境、吉崎の入江を、舟に棹指て、汐越の松を尋。

西行

終宵嵐に波をはこばせて
月をたれたる汐越の松

この一首にて数景尽たり。若、一弁を加ものは、無用の指を立るがごとし。丸岡、天竜寺の長老、古き因あれば尋ぬ。又、金沢の北枝と云もの、かりそめに見送りて、此処まで、したひ来。所々の風景、過さず、思ひつづけて、折節、あはれなる作意など聞ゆ。今既、別に望みて、

物書て扇引割名残哉

五十丁、山に入て、永平寺を礼す。道元禅師の御寺也。邦畿千里を避て、かかる山陰に跡を残し給ふも、貴き故有とかや。

【語釈・語り】

長老禅宗寺院の住職。過さず＝見逃さず。かりそめに＝ほんのそこまでと。

【現代語訳】

加賀と越前の境の、吉崎の入江を船に棹さして、汐越の松を尋ねた。

西行

終宵嵐に波をはこばせて
月をたれたる汐越の松

この一首でさまざまな美景が言い尽くされている。もし、一言でも加える者があるなら、五指に無用の一指を加えるようなものだ。

丸岡の、天竜寺の住持は、旧知の縁が

あるので訪問した。また、金沢の北枝（ほくし）という者が、ほんのそこまでと見送りながら、この所まで、ついてきた。所々の風景を見逃さず、句案を続けて、折にふれ、趣（おもむき）のある着想など聞かせてくれる。今いよいよ、別れに臨んで、

物書（ものかき）て扇引割（おうぎひきさく）名残（なごり）哉（かな）

五十丁、山に入って、永平寺を礼拝した。道元禅師（どうげんぜんじ）のお寺である。帝都の地を千里避（さけ）て、このような山陰に教えの跡を残されたのも、尊い理由があるということだ。

四十二　福井　目次へ

【原文】

福井は三里計（ばかり）なれば、夕飯（ゆうめし）したためて

出るに、たそかれの道たどたどし。爰に、等栽と云古き隠士有。いづれの年にや、江戸に来りて、予を尋。遙、十とせ余り也。「いかに老さらぼひて有にや。将、死けるにや」と、人に尋侍れば、いまだ存命して、そこそことをしゆ。市中ひそかに引入て、あやしの小家に、夕顔、へちまのはえかかり、鶏頭、はは木々に、戸ぼそをかくす。「扨は、此うちにこそ」と、門を扣ば、侘しげなる女の出て、「いづくよりわたり給ふ道心の御坊にや。あるじは、このあたり何某と云ものの方に行ぬ。もし用あらば尋給へ」と云。かれが妻なるべしと、しらる。「むかし物がたりにこそ、かかる風情は侍れ」と、やがて尋あひて、其家に、二夜とまりて、「名月は、つるがの湊に」と、旅立。等栽も、「共に送らん」と、裾おかしうからげて、「道の枝折」と、うかれ立。

【語釈・語り】

ここは唯一の芭蕉の一人旅です。心細いですね。其家等栽宅。

【現代語訳】

福井は三里ほどなので、夕飯を食べてから出かけたが、夕暮れの路は心細く足もとがおぼつかない。この地に、等裁と云う古くから知られた隠者がいる。いつの年だったのか、江戸に来て、予を尋ねた。遥か十年以上も前だ。「どんなに老いさらばえているか、はたまた、死んだのか」と、人に聞けば、いまだ存命していて、家はどこそこだと教えてくれた。市中のひっそりと引っこんだ所で、粗末な小家に、夕顔や、へちまの蔓が延び絡まり、鶏頭や帚木が、入り口の戸を隠している。「さては、ここに違いない」と、

門口を叩けば、みすぼらしい女が出てきて、「どちらからおこしの道心のお坊様でしょうか。主人は、この近くの何某と云う者の所に参っております。もし用がおありならばお尋ねください」と云う。あれが妻に違いないと分かった。「昔物語でもなければ、こんな風情はあり得ない」と、その足で、尋ねて等裁に逢い、その家に、二夜泊まって、「名月は、敦賀の港で」と、旅立つ。等裁も「いっしょに送りましょう」と、裾をおかしな具合にからげて、「いざ道案内」と、浮かれ立つ。

四十三　敦賀

目次へ

【原文】

漸、白根が嶽かくれて、比那が嵩あらはる。あさむつの橋をわたりて、玉江

の芦は穂に出けり。鶯の関を過て、湯尾峠を越れば、火打が城。かへる山に初雁を聞て、十四日の夕暮、つるがの津に宿をもとむ。

其夜、月、殊晴たり。「あすの夜も、かくあるべきにや」といへば、「越路のならひ、明夜の陰晴はかり難し」と、あるじに酒すすめられて、けいの明神に夜参す。仲哀天皇の御廟也。社頭神さびて、松の木間に月のもり入たる、おまへの白砂、霜を敷るがごとし。「往昔、遊行二世の上人、大願発起の事ありて、みづから葦を刈、土石を荷、泥濘をかはかせて、参詣、往来の煩なし。古例、今にたえず、神前に真砂を荷ひ給ふ。これを、遊行の砂持と申侍る」と、亭主のかたりける。

月清し遊行のもてる砂の上

十五日、亭主の詞にたがはず、雨降。

名月や北国日和定なき

【語釈・語り】

神さびて神々しく。

【現代語訳】

次第に白根が嶽が見えなくなり、比那が嵩が現れる。あさむつの橋を渡って、玉江の芦の穂が出ているのが目についた。鶯の関を過ぎて、湯尾峠を越れば、火打が城である。帰山に初雁の声を聞きて、十四日の夕暮れに、敦賀の港に宿をとる。

その夜は、月が特によく晴れた。「明日の夜も、このようだろうか」と言えば、「越路の天気のつねで、明日の夜の曇るか晴れるかは予想がつきません」と、主

に酒をすすめられ、気比の明神に夜参する。仲哀天皇の御廟である。境内は神々しく、松の木の間に月光が漏れさしている様は、神前の白砂が、霜を敷いたようである。「その昔、遊行二世の上人が、大願を発起し、自ら葦を刈り、土石を担って、泥濘を乾かせてより、参詣や、往来の支障がなくなった。その古例が今でも絶えず、歴代の遊行上人は神前に真砂を担いお運びになる。これを、遊行砂持と申します」と、亭主は語った。

月清し遊行のもてる砂の上

十五日、亭主の言葉通り、雨が降る。

名月や北国日和定なき

四十四　種の浜

目次へ

【原文】

十六日、空晴れたれば、ますほの小貝ひろはんと、種の浜に、舟を走。海上七里あり。天屋何某と云もの、破籠、ささへなど、こまやかに、したためさせ、僕あまた舟にとりのせて、追風、時の間に吹付ぬ。浜は、わづかなる蜑の小家にて、侘しき法華寺有。爰に、ちやをのみ、酒をあたためて、夕暮のさびしさ、感に堪たり。

さびしさやすまに勝たる浜の秋

波の間や小貝にまじる萩の塵

其日の日記、等栽に筆をとらせて、寺に残す。

【語釈・語り】

吹付ぬ吹き着いた。

【現代語訳】

十六日、空が晴れたので、ますほの小貝を拾おうと、種の浜に舟を走らせる。海上七里ある。天屋何某と云う者が、破籠や小竹筒など、心をこめて支度させ、僕を多く舟に乗せて出たが、追風を受けて、たちまち吹き着いた。浜は、みすぼらしい漁師の小家があるだけで、侘びしい法華寺があった。ここに、茶を飲み、酒を温めて興を尽くしていると、夕暮れのさびしさが、感に堪えた。

さびしさやすまに勝たる浜の秋

波の間や小貝にまじる萩の塵

その日の日記を、等栽に書かせて、寺に残す。

四十五　大垣

目次へ

【原文】

露通も、このみなと迄、出むかひて、みのの国へと伴ふ。駒をはやめて、大垣の庄に入ば、曾良も、伊勢より、かけ合、越人も、馬をとばせて、如行が家に入集る。前川子、荊口父子、其外、したしき人々、日夜とぶらひて、ふたたび蘇生のものにあふがごとく、且よろこび、且なげきて、旅のものうさも、いまだやまざるに、長月六日になれば、「伊勢の遷宮、おがまん」と、又ふねに乗て、

蛤のふたみに別行秋ぞ

【語釈・語り】

曾良も元気になったようです。でも、旅はまだ続きます。余韻を残して完。

【現代語訳】

露通も、この敦賀の港まで出迎えにきて、美濃の国へ同行する。馬を速めて、大垣の庄へ入ると、曽良も、伊勢より、駆けつけ、越人も、馬を飛ばせてやって来て、如行の家にみなが集まった。前川子、荊口父子や、その他、親しい人々が、日夜訪ねてきて、再びあの世から蘇生した者に会うかのように、且つ喜び、且つ嘆きて、旅のつらい思いも、まだ残っているのに、九月六日ともなったので、「伊勢の遷宮を、拝もう」と、又舟に乗って、

蛤(はまぐり)のふたみに別行(わかれゆく)秋ぞ

参考文献・URL

芭蕉自筆奥の細道　岩波書店
おくのほそ道評釈　尾形　仂
松尾芭蕉集２　新編日本古典文学全集
「奥の細道～名句でたどるみちのくの旅」
NHK「古典購読」佐藤　勝明
芭蕉庵ドットコム
http://www.bashouan.com/index.htm